

「よこすかキャリア教育推進事業 中学生“自分再発見”プロジェクト」

工藤 幸久さん	横須賀商工会議所情報企画課課長
佐藤 廣さん	横須賀商工会議所 情報企画課
望月 健二さん	よこすかキャリア教育推進事業キャリア教育コーディネーター
北川 貴章さん	横須賀市教育委員会 学校教育部教育指導課 指導主事
渡辺 力さん	湘南菱油株式会社 教育センター長
高橋 陽子	公益社団法人日本フィランソロピー協会 理事長

**横須賀の人材を
横須賀の力で育てたい
自らの手で地域の未来を創
る試み**

その重要性と必要性が語られる中、学校現場だけでは実現が難しいキャリア教育。そこで、キャリア教育を推進するために、地域の産官学が協力し、大きな成果をあげているユニークな事例がある。

神奈川県横須賀市では、商工会議所、地方自治体、教育委員会が連携し、地元企業から「横須賀で働く社会人」＝「マイ・タウン・ティーチャー」（以下MTT）を各中学校に派遣。「中学生“自分再発見”プロジェクト」というキャリア教育を行っている。その先進的な取り組みは文科科学省と経済産業省が平成23年度に新設した「キャリア教育推進連携表彰」で最優秀賞を受賞。中学生、MTT、教員それぞれが学びを共有できる優れた取り組みが注目を集めている。

今回は同システムを作り上げた商工会議所、教育委員会、キャリア教育コーディネーター、MTTの方に

お集まりいただき、地元企業による地元の子どものためのキャリア教育現場を聞いた。



教師でも親でもない 大人から学ぶ機会をつくる

「学校という現場からは遠い立場にあるように見える商工会議所が、なぜキャリア教育に取り組もうと思われたのでしょうか？」

工藤 これまでは住民全体で地域を育て、子どもたちを育てるという形が地域コミュニティでした。しかし近年、それが形骸化し、フリーターやニートなど若い人たちの無就業が増え、また横須賀市全体でも人口が減少し、高齢化が進んでいます。横浜まで電車で30分、東京まで1時間



工藤 幸久さん

という便利な場所ですから、若い人たちは横須賀を出て行ってしまいう傾向にあります。本事業を立ち上げるきっかけとなったのは、当時の会頭に「このままでは人材がいなくなってしまう」という危機感と、「横須賀で育った子どもたちは、大人になつたらぜひ、またこの横須賀で働いて欲しい。そういう世代を育成するためにも、今、子どもたちに何かやっていけるのではないか」、という思いがありました。

「しかし学校教育の現場と商工会議所ではフィールドが異なります。どうやって協働するところまで関係を作ったのでしょうか。」

工藤 今、全市の公立中学校では2年生になると職場体験が行われています。職場体験が行われ始めたころから、私たちは、学校からのインターンシップ（職場体験）の要望に対して、受け入れ先の地元企業を紹介して生徒さんたちに行っていたんだけど、ということをしていました。ところが、企業側もどう受け入れてよいかわかりませんでしたし、当所としても子どもたちが企業の中でどう



佐藤 廣さん

いう風に受け入れられているのが見えず、子どもたちの学びになっていないのではないか、という思いがありました。また、せっかく地域の企業で職場体験しても、それが身にならなければ地域産業に子どもたちの目が向くことにつながらないのではないかという問題意識もありました。そこで私たちは、子どもたち、企業、学校、それぞれにメリットがある形をつくり地域の人材を育ててゆく必要性を感じ、平成17年度から教育委員会が主催する「キャリア教育推進プロジェクト協議会」に当所からも参加し、学校側と子どもが年間を通じて意見を交換するようになりました。また、2008年1月には当所が主体となり、教育委員会、横須賀市と共にキャリア教育推進のための準備会を立上げ、「中学生「自分再発見」プロジェクト」を2校からモデル的にスタートさせまし

た。そして平成21年度より中学校の校長経験者を初代のキャリア教育コーディネーターとして迎え、本格的な事業のスタートとなりました。

―「中学生「自分再発見」プロジェクト」とは具体的にどんなことを行うのでしょうか。

佐藤 今、市内の中学生は2〜5日間、職場体験に行きます。ただ行きっぱなしでは一過性のイベントで終わってしまうので、それを学びにつなぐプログラムを3種類作り、MTTにご協力いただきます。

まず、おもに職場体験後に行う「グループディスカッション」プログラムがあります。さまざまな業種のMTT20数名に中学校へ出向いていただき、それぞれ5、6人の生徒と一緒に「職業観」「勤労観」について話をしていただきます。「職場体験、どうだった？」から始まって、「自分はこんな気持ちで働いているんだよ」とか、「働くとはこういうことだと思っ」など、教師でもなく、親でもない働く大人からいろいろ聞くことで、生徒たちも自分の職場体験を振り返ることができるんで

すね。

もうひとつが「ポスターセッション」です。これはMTTによるお仕事紹介プログラムで、職場体験に行く前の子どもたちに提供します。具体的には体育館などに机を置き、MTTに展示ブースを作ってもらいますね。たとえば大工さんなら、かんながけを見せて、生徒にも体験させ、大工の仕事とはこんなことだよ、と見せていく。警察だと、本物の道具を使って指紋採取を体験したり、実物の手錠をかけてみるということもします。

また「マナー研修」もあって、キャリアアカウンセララーの資格を持つMTTを派遣し、研修を行います。名刺交換の仕方、挨拶や身だしなみは大事だよ、という話を職場体験の直前に行なって、生徒に仕事に対する意識を持ってもらおうですね。

―現在は市内の何校くらいが、このプログラムに取り組んでいるのでしょうか？

佐藤 横須賀市には23の中学校があります。まず平成20年度に推進校2校からスタートさせ、21年度は5

校、22年度9校、23年度11校、そして今年度の24年度は19校にまで増えました。現在、推進校に指定されていない4校も、それぞれの学校で自主的に地域の大人たちを巻き込み、独自プログラムを展開しています。

MTTを学校に受け入れてもらうための戦略

―伺っていると、とても楽しそうなプログラムですね。ただ教育現場は多忙で、かつ保守的な部分もあり、実際に中学校で実施していくにはハードルが高かったのではないのでしょうか。

北川 毎年、推進校希望の中学校に手を挙げてもらっていますが、どこも一度体験すると必ず継続し、一度きりでやめた学校はありません。キャリア教育という点、今までは先生方が直接、地元企業にあたって職場体験先を開拓し、忙しい中、さまざまな準備をしていたんですね。そういう部分を私たちの事務局で担うことができるし、そのあたりがわかってくると、「利用しない手はない」と思ってもらえます。また校長



北川 貴章さん

先生も異動するので、「前の学校でやっていたすばらしいプログラムがあるから」と新しい学校でも取り組んでくれる場合が少なくありません。

佐藤 プログラムも学校ごとにテーマを決めてもらって、それぞれ違う授業展開をしているので、先生方が取り入れやすい形にアレンジすることが出来ます。毎年、4〜6月に私どもが学校に出向き、1年間のプログラム計画についてヒアリングします。キャリア教育コーディネーターが中心になり、細かいすりあわせをするんですね。3つのプログラムをすべて行うのではなく、学校によっては「ポスターセッション」だけやるとか、「ポスターセッション」と「グループディスカッション」を組み合わせるなど、アレンジは自由です。

工藤 学校によって温度差もあるので、年間を通じて2回くらいのもあるもあれば、数多く行う学校もありますね。

ーキャリア教育コーディネーターとはどのような役割を担っているのでしょうか。

佐藤 ヒアリングの際はキャリア教育コーディネーターがメインになって、学校のニーズを引き出します。プログラムによって「こういう企業がいいね」という段階になれば、今度は私たちの担当です。商工会議所のコネクションを使って、企業と折衝します。また初めて、このプログラムに参加する企業には、キャリア教育コーディネーターが「こういう話をしていたかと生徒の学びになる」「こういう風に御社の仕事を生

徒に紹介してください」という話をしています。望月さんには、これまでのキャリアを生かして力になってもらっています。

望月 私は横須賀市立の工業高校の教員として、異動なくずっと働いていましたし、進路指導をやっていた関係から横須賀をよく知っています。また当時交流のあった先生たちが学校現場で管理職になっていたんですね。学校の事情もだいたいわかっていたので、「この先生の言いたいことはこれなのかな」「こういうことがやりたいのかな」というのがわかる。その上で「佐藤主任、先生の希望を取り入れてやってみる？」と話をつなぎます。

佐藤 このプログラムを取り入れる、入れないの判断は校長の意思なので、新しく始める学校の担当教師は、みなさん不安に思います。でも子どもたちの様子を見ながら、先生方が活用しやすいように利用してもらいもので、こちらからあれやれ、これをやれと指示するプログラムではなく学校と事務局が話し合

いながら、学校の意思を尊重しプログラムを構築するという説明をすると、みなさんホッとされます。「じゃあ、うちの生徒にはこれが足りないから、こうしてください」という話がどんどん出てきます。

望月 先生によっては「うちの生徒に、ちょっとやんちゃなのがいるから、外の人に来てもらって大丈夫だろうか」と心配される方もいます。でもそういう生徒こそMTTに見てもらって、どうすればいいか考えればいいし、逆にそういう生徒も熱心にMTTの話を聞くということも多々見受けられます。

渡辺 実際、MTTとして学校に行った時、やんちゃな子どもたちがいても全然かまわないんです。

**MTTが語る生きざまに
生徒は心を奪われる**

ー渡辺さんはMTTとして何度も中学校に入り、生徒たちと対話をされています。実務で忙しい傍ら、MTTを始められたきっかけはなんですか？



望月 健二さん



渡辺 力さん

渡辺 私もそんなに深く考えて参加したわけではないのですが、やはり横須賀で育って、横須賀に暮らして、この町が大好きですし、横須賀をよくしたいという気持ちがあります。私たち世代が頑張るのはもちろんですが、その後の世代、今の中高生をどう育てるのかということも、企業としての社会貢献ではないかと思いました。そうやって育てた子どもたちが将来、自分の会社に入ってくれば嬉しいです。

また私の仕事自体、社員教育を社長にかわって行う部署ですから、同じく人を育てるという意味で横須賀市に協力できればと思いました。採用も担当しているので、大学生から社会人までの年代とはいっても接しています。その前の世代はどんなことを考えているのか関心があったと

いうこともあります。

—生徒の前で話をするとき、苦勞したことはありませんか？

渡辺 50分の持ち時間で、ずっと仕事の話をしていると生徒たちも飽きてきます。そこで最後の10分、15分は「なんでもいいから質問して」と言っんです。仕事の説明をしていた時は質問が少ないのに、自由に聞いていいよと言っくと、とたんに生徒が元気になって、予想もしない質問がきます。「お子さんはいますか？」「お子さんは女の子、男の子？ 何歳ですか？」と。みんな、そんなに僕に興味があるのか、というくらい（笑）。

佐藤 初めて参加したMTTの方は「仕事以外の話をしてしまっって申し訳ありません」と言われる。確かに仕事の話も大事ですが、実はその人の生き方や生き様をディスカッションしてもらっって、「この人に会っ」ということが大事なんです。ですから仕事のテーマだけに絞らな、日常生活のこともいいですし、これまで生きてきたことをすべてぶっつけて

くださいという話をMTTの方々にいつもしています。

渡辺 自分が中学高校の時は野球部にのめり込んでいたという話をするのと、部活動をしている子は興味津々に聞きます。部活をやっっていない子どもでも、「この人は中学生の時、プロ野球選手になりたいという夢を持っっていたのか。自分も夢をみっけなきゃ」と思い始める。「今、夢がなくてもいいから、なにかやりたいことを見っけなさい」という話をすると、全員が頷いて聞いてくれまっす。

北川 教員が言っうとは違っって、不思議な説得力があるんです。たとえばこの間の「グループディスカッション」では、職を転々として、30歳を過ぎてから初めて今の職業が自分にあっっているとわかったというMTTの方が話をしてくれました。今までやっってきたバイトのこと、自分の趣味、生き方の話をずっつとされて、「ここで働いた時は、こういう部分が自分に合わなかつた」「この仕事は面白かつたけど、ここは問題があった」など具体的な内容が興味

深く、子どもたちは食い入るように聞いていました。

中学2年で行われている職場体験では希望する職種に生徒全員が行けるわけではなく、結果的に第三希望の会社になるということもありまっす。すると子どもたちはモチベーションが低い。そのまま企業さんに送り出すのも申し訳ないから、先生方は「第三希望でも頑張っつてこい」と言っうけど、あまり説得力を持たないんです。でも、そのMTTの方は「自分はいらんことをやっつたから、今の仕事に出会っつた。今までやっつたバイトも無駄になっつたとは思っつていない。みんなも行きたくない職場に行くかもしれないけど、知らなかつた仕事に出会えるかもしれないから、楽しんでこいよ」と。その話を聞いた子どもたちはモチベーションがぐっつと高くなりました。

いろんなことを経験された方が言っうから、説得力も重みもある。学校の先生は自分なりに感じていることは言えるけれど、大学を出て、そのまま先生になると、あまり他の職業を経験していない部分があるので自分の話としては語れまっせん。

MTTにも教師にも 学びと気づきがある

―社員を参加させる側の企業にとっても、このプログラムから得ることがあるのでしょうか。

渡辺 うちが県内に18カ所のサービステーションを経営しています。基本的に接客業ですから、人に伝える難しさを経験していますし、それを学ぶ場としてMTTはよい経験になります。自分たちが今までお客様に話していたことでも中学生に話して理解してもらえなかったら、実は現場でもお客様に伝わっていないかもしれない、という振り返りができます。それなら、どう説明すればいいのかを考えますし、話し方、人に伝える練習という意味でいい勉強ができます。

―生徒の前で話すことで学ぶのですね。

渡辺 自分の仕事について質問を受けて答えられないことは、働いている人間として一番恥ずかしいことで

す。だから何を聞かれても答えられるように準備する。その段階で自分が今までやったことのない仕事も覚えなれないといけない。短期間で人を成長させるには、他人に教えるという行為が一番ではないかと私は感じているんです。実際、職場体験で中学生を受け入れてから、お客様との対応が変わった者子もいます。新入社員のレベルだと変化がすぐに出てくるので、今後は若い社員を出すようにしようという話はしています。

工藤 私たちも商工会議所という立場があるので、教育界側でのメリットだけでなく、企業にもメリットのある形でなければバランスが取れなくなります。プログラムのときは学校現場に20数名のMTTが入りますが、なかなかその場では交流を持ってないので、年に一度、MTT交流会を開催しています。この場では自社のチラシなどを持参してもOKですし、異業種交流会のような形で新しい関わりが生まれて、なにかビジネスに生かしてもらえればと。また学校の先生たちにも参加してもらおうので、いろいろと本音の話ができるんですね。いつも非常に多くの方に参

加していただいています。

―教育委員会ではMTTをどう受け止めておられますか？

北川 地域の子どもを支えるという姿勢で、忙しい時間を割いてボランティアで来ていただいているので、我々の立場からするとありがたい一言です。最初は企業の方が学校にたくさん入ることで教育がかわれるのではないかと、子どもたちが利用されるようなことがあったらまずい、という考え方もあったんです。でも今はほとんど、そんな声も聞きません。企業の方はみなさん、子どものことを考えているし、わかった上で来てくださる。商工会議所の方々は学校のことがわからない、というお話でしたが、そんなことはないです。佐藤主任には、自らが積極的に各学校の先生とコミュニケーションをとって頂いているので、どの学校の校長先生とも気さくに話が出る間柄ができあがり、一心同体で動いているので、安心してプログラムを実施できます。恐らく、こういう事例は全国でも珍しいですね。

―先生にとってもプラスの経験になっていきますか？

北川 先生方も基本的には熱心に勉強されていますが、普段、生徒を相手にしていることが多く、一般の社会人とは接点がありません。ですから会社で当たり前に行われていることも、先生の間浸透していないことが少なくありません。

―名刺を持っていない先生が多いのは驚いたことがあります。

北川 そうですね。でもこの事業を通して、プログラムを担当された先生は名刺を作り、一般企業や商工会議所など、いろんな人達と連絡を取る。積極的に外部と交流できるので、教員研修という意味でもいい機会になっていきます。

佐藤 生徒のためのマナー研修が先生の研修になっていく場面も見ます。先生方も「こうするんだ、ああすればいいんだ」と楽しそうにされていて。いい効果が出ていると思います。



成功事例を横展開させるのがキャリア教育普及の秘訣

「プロジェクトがスタートして5年が経過しました。成果は見えてきましたか？」

工藤 やはりもう少し、時間がかかると思います。長い目で見ていただければ。

佐藤 数少ない事例ですが。中学2

年のときに職場体験にいったホテルに就職した子がいます。その子が書いた「職場体験ありがとうございました」という感想文をホテル側が残しておいてくれて、「君、この子だよね」と。いい話を聞きました。

望月 この事業は横須賀市で行っていますが、高校は神奈川県教育委員会の管轄になり、協働するという段階にないんですね。高校進学後のアンケート調査も横須賀市立高校なら実施できますが、県立高には持つて行きにくいのです。

工藤 横須賀の中で中学高校大学、そしてインターシップも体験して就職につながるなど、長期的プログラムがあると、地元への定着率も変わってくると思います。

「プロジェクトそのものは非常に順調ですが、今後の課題はありますか？」

佐藤 MTTの数ですね。推進校が19校になったので、渡辺さんにはひとり何役もやっていたいただいている状態です。

渡辺 4校くらい回っていますね（笑）。

佐藤 特定の方に負担感が出てしまふとよくないので、もっとMTTの分母を増やしていきたいです。

工藤 横須賀は現在、商業サービス業中心で、従業員がほとんどいない小規模企業が多いんです。そういう企業に年二度、三度とMTTをお願いすると負担がかかるので、全体数が増えるのをいいます。またプログラムが成熟するにたがって生徒の質も上がり、MTTの話が物足りなく感じる場合があります。その場合は当所がちゃんと企業をケアして、お互いが成長する形をとらないといけないと思います。

佐藤 今度のMTT交流会の中で初めて、推進校の先生に「MTTから生徒に伝えてもらいたいこと」というテーマで20分くらい話をしてもらいます。

工藤 講演会のような大げさなものではなく、子どもたちはこう思っ

ているから、こういうところをみなさんに話してもらえるとありがたいという形です。普及という意味では第一段階は過ぎて、今後はMTTのレベルを上げていく。そうすることで他の地域への普及にもつながると思います。

「横須賀市では産官学の連携が成功しました。その秘訣はなんですか？」

工藤 まず、「横須賀の人材は横須賀で育てる」という思いをもった多くの大人達の協力があるからこそであり、また、やる気のある校長先生、教員の方と協力して、1校、2校で集中してプログラムを行って成果を出し、それを横に波及させたのが成功の秘訣だと思います。どうしてもどの学校にも平等に、全体的にやって欲しいという考えがあるので、それが一番失敗するパターンではないでしょうか。

「横須賀市のユニークな取り組みがぜひ横に波及し、ゆくゆくは全国に広がって欲しいと思います。本日はありがとうございました。」